



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

麻疹(はしか)について

春から初夏に流行がみられる麻疹は、乳幼児期に最もかかりやすいウイルス感染症のひとつですが、最近では、大人でも発症して重症化することが問題となっています。潜伏期間を経て発症すると、主に、発熱・咳・鼻汁・めやに・発疹の症状があらわれます。最初3〜4日間は38度前後の熱で、一時おさまりかけたかと思うとまた、39〜40度の高熱と発疹が出てきます。高熱は3〜4日で解熱し、次第に発疹も消失します。

では、なぜ麻疹は怖いのでしょうか。それは、千人に一人は死亡する病気で、発症してしまうと特効薬がないからです。また、主な合併症として、気管支炎・肺炎・中耳炎・脳炎などがあります。麻疹のウイルスは、たとえば、大勢の集まる場所に一人でも感染者がいると、1メートル以上を越えて人に空気感染させるほどの

力があります。そのため、感染してから解熱後3日までは、他者への感染力が強いので、安静に過ごして外出をひかえなければなりません。

それでは、どのような治療法があるのでしょうか。感染してからの潜伏期間は比較的長く、感染者との接触後、原則3日以内であれば、ワクチン接種すれば、発症を抑えられる可能性があります。しかし、潜伏期間中に感染を知ることが困難であり、何よりも予防接種が重要となります。麻疹は2歳未満の子どもに圧倒的に多く、発症すると命にかかわるので、1歳を過ぎたら、できるだけ早く予防接種をすませておくようにしましょう。もし、発症した場合には、対症療法として、39度を超える高熱の時は、給水力の高い「イオン飲料」などを少しずつ回数多めに摂取することが大切です。乳幼児の場合、水分の補給を受け付けず、はき出してしまふケースが多くみられるので、このような時は、入院治療となること

もあります。なお、解熱剤(ねつさまし)は、自己判断で市販薬を服用するのは危険です。必ず処方薬を医師の指示にしたがって服用してください。

最後に、特に気をつけてほしいのは、麻疹ウイルスは一度体内に免疫が構築されると、一生にわたり二度とかかることがないとされてきましたが、乳幼児期に予防接種をしていても、免疫の低下により感染するケースもあるということです。つまり、十分な抗体がない状態で感染するケースです。特に、妊婦は生ワクチンの予防接種ができないため、これから妊娠を望む人で、乳幼児期にしか予防接種していない人は、抗体の有無を血液検査で知っておくと安心です。

(長田区 ふれあい薬局長田)

浅田 圭一

